

第6学年国語科の実践

1 単元名 「平和」について考える

2 単元目標

- ◎ 「平和」に関わる自分の意見が説得力をもつように、例や資料を集め、意見を明確につたえるために、構成や表現の効果を考えることができる。
- 平和に関わる様々な資料を探したり、友達の考えを聞いたりして自分の考えを深めることができる。
- 書き言葉と話し言葉の違いに気づく。

3 ひびき合う児童をめざすための指導の工夫

4月から、自分達がどのような姿をめざしたいのかを共有する場を大切にしてきた。そのなかで、子ども達はこの5年間の積み重ねの中で「聞く」ことの大切さや基本を学んできているということがわかった。教師や友達の話や話を黙って静かに聞くことができる児童が多い。しかし、わかったつもりになっていたり、自分の事として聞けていなかったりすることもしばしばある。そこで、その考えについて質問したり反応したりできるよう促してきた。また、ペアトークを活用し、友達の考えを自分の言葉で説明し直す場を設ける等の工夫をしてきた。どの子の考えも、一つの意見として受け入れられるよう、基本に戻ってまずは共感的に聴くことの指導に力を入れているところである。「でも」の使いどころを考えることや、説明がわかりにくい場合には質問するだけでなく、周りが言い換えたり補足したりすることで理解が深まることも確認しながら、学び合いの基礎となる受容的・共感的に聴く姿勢を意識して日々過ごしているところである。

話すことについては、少人数ではしっかりと考えを伝えられるが、全体へ伝えようという気持ちは少ない。書くことやペアで話す時間を保障し、話す自信を持てるよう心がけてきた。教師からの意図的指名や子ども同士で座席表を見て聴いてみたい人に質問することも取り入れ、できるだけ全体に対して伝える経験を積めるよう意識している。相手を意識し、「ここまでのいい?」「わからないところはありますか」など確認しながら話すことができる児童もいる。それらを価値付け、相手を意識した話し方ができるよう指導してきているが、まだ十分とはいえない。ただの「言いたい」ではなく、「友達に伝えたい」という思いが持てるよう、聴くこととあわせて指導をしている。

友達の考えにふれて自分の考えを深める経験をしている子は多いものの、聴くことはできるが伝えることに消極的であったり、言うことはできているが聴き手を意識していなかったりと、ひびき「合う」には至らない。話す聞く指導を中心に進めているところである。自分の考えを大切に思えるよう、ノート指導を丁寧に行うことで、周りにも伝えたい、議論したいという思いが高まるよう努めている。

また、読書が好きな児童が多く、読書タイムが始まる前や給食の待ち時間、休み時間にも本を静かに読んでいる姿をよく見かける。「やまなし」を学習した際には、他の宮沢賢治の作品を数多く読んでいる児童も何名かいた。日頃のニュースや歴史について関心が高い子もいる。前単元「この絵、私はこう見る」では、多くの子が自分なりに学習したことを取り入れて表現することができた。書き出しを工夫する、問いかけを入れる、オノマトペを使うなど、読み手を引きつける工夫をしたり、一番の主張を終わりに持つてくることでわかりやすくなるように気をつけたりして書くことができた。

4 単元と指導について

①単元について

12歳の子ども達にとって、日常の中で真剣に「平和」について考えることは、あまりないと考える。子ども達は、それぞれの生活経験や学習経験を積んできている。その中で築かれてきた、ぼんやりとした「平和」についてのイメージを語り合い、輪郭を持たせていくところから学習を始めていく。そのようなことから学習を深めていく過程で、さまざまな見方に触れ、話し合いを通して12歳の自分なりの「平和観」を築き上げることができると考えた。今後、社会科の歴史や憲法についての学習の中でも「平和」について考える場は多くある。本単元においてもった平和観は、子ども達が学び、生活していく中で、変化・発展させていく基となる部分であるととらえている。

しかし、「その『平和』はどのようにしたら実現するのか、可能なのか」あるいは、「誰によって作られる（維持される）ものなのか」「平和のために自分たちは何ができるのか」という問題になってくると、これまでの知識や経験で考えをもつことは困難である。みんな本気で考えたことがないことで、わからないからこそ、知識や知恵、様々な見方を出し合いながら議論し、考えを深めていこうとする必然性が生まれると考えた。

そこで、資料「平和のとりでを築く」を扱い、筆者の主張を読み取ることを通して「自分達にできること」について考えをもつための足がかりにしていきたい。「平和の砦を築くための世界遺産なのだ」という言い切る形で締めくくられることから、筆者の強いメッセージが読み取れる。また、「平和」に一見そぐわない「とりで」という言葉をあえて使うことで、題名にどのような思いを込めているのか考えることから、反戦・反核を訴える筆者の強い意図に気づくことができる文章である。構成や表現など、筆者の主張が読み取れる点は多くあるが、読む目的を見失わないよう注意し、必要に応じて他の資料も提示していきたい。自分の考えを構築していくことで、資料をどう読み取っていくかという「読み方」を確認するという意味でも、全員で読み解く最初の資料として扱いたい。

自分の考えを持ち、説得力をもって述べることについては、「討論会をしよう」で学習した(1)体験や具体例を用いる(2)自分とは異なる立場の意見を取り入れる(反論を扱う)ということが大切である。また、前単元「この絵、わたし

はこう見る」において読者を引きつける書き方(1)問いかけを入れる (2)書き出しを工夫するなど、それぞれの工夫として活用できるとよい。伝えたい思いが高まることで、「誰に」「何を」伝えるのかという目的意識が明確になり、子ども達自身がこれまでの学習で習得したものを発揮できるのではないかと考える。

②切実な問題について

始めは漠然とイメージを語るにすぎなかった『平和』について考える」ということが、いかに子ども達にとって切実に、具体的な問題となっていくか、その過程や手立てについて以下のように考えている。

まず、自分とは違うイメージとの出会いである。つまり、異なる見方・考え方にふれる中で、「そういう見方もあるのか」「それって『平和』ってことなの？」と、視野が広がったり自分の中にある価値観について問い直したりするチャンスになると考えた。

つぎに、「平和とはいえないもの」について目を向けていくことである。過去の事実だけでなく、今地球上のどこかでも行われていることであり、その爪痕は至るところにある。それらを知ることで、「平和」への願いを高めていくことができると考えた。情報を収集するための手立てとして、映像の提示や学級文庫に参考となりそうな本を用意していきたい。

その上で、自分達が描くような「平和」であり続けることはできるのだろうか、「平和」にできるだろうかと問い、考えを深めていきたい。様々な資料や文献から、ニュースへ関心を向け、学習を深めていく中で、「このままでは、今の生活は続かないのかもしれない」という不安が当然生まれると考えている。楽観的な推測だけでなく、世の中に渦巻く「平和とはいえないもの」について話し合いを通して垣間見、見えない未来に対して不安や危惧は広がるのではないだろうか。その悶々とした話し合いを大事にすることで、「平和は誰によって作られるものなのか」という疑問が生まれると考える。寝食の心配なく暮らす子ども達は、当然「どこかの国の偉い人たち」という他人事のような感覚をもつかもかもしれない。しかし、同時に「本当にそうなのか」「それでよいのか」という問いも生まれるだろう。自分達にはどうしてもできない大きな問題であるが、大きな問題をもつ社会を形成しているのは国民一人一人だからである。一見、日常生活とは遠いが、実は密接に関わる問題だからこそ、その関わりに気づいていく過程で「本気で考えたい」「考える必要がある」ものとしてとらえられるようになっていくと考える。このような思考の過程をじっくり積み重ね、葛藤の中で資料と出会わせていく。「平和のとりでを築く」を始めとし、様々な立場から平和に向けて取り組む人々の存在を知り、人々の共通する平和への願いに気づき、自らの関わり方について考えていけるのではと考えた。遠くぼんやりとしていた「平和」を願うことが、「自分たちが平和のためにできること」という自らの生き方に関わる問いへと変容していくことで、子ども達にとっての切実な問題になるととらえている。

③ひびき合いについて

この問題に対しては、明確で単純な答えは当然ないだろう。子ども達が練り上げていく考えは、「これでよいのか」という不安と、12歳なりの「きっとこうすれば…」という希望が含まれているだろう。単純に自分だけでは判断できない、多様な答えがある問題だからこそ、「友だちはどう考えたのだろうか」と、聞く必然性のある話題となると考えた。

また、それぞれが様々な資料や文献から、自分の考えを構築していくため、交流していくことで、自分にはなかった角度からの見方や、同じような考えでも異なる根拠に出会うことができると考えた。1つの正解がない問いに対して、「なるほど」「確かにそういう考え方もあるのかもしれない」と様々な考えに共感し、自分の考えについて「本当にこれでよいのだろうか」と見直し、迷いながらよりよいものへと再構築していく姿を、ひびきあいの姿としたい。

そのために、まず前時までに一人ひとりが自分なりの考えを持つための活動と考えをまとめる時間を確保する。資料や文献などをじっくり読みながら考えを構築していくためには時間が必要であるので、読書タイムや家庭学習などでも読み進めていけるよう、時間にゆとりを持って単元を進めていくようにする。さらに、少人数での発表練習の時間を設けるとともに、討論会の学習を生かし、本単元においては、子どもたちで司会をし、話し合いを進められるようにしていく。「きれいごと」ではなく、「みんなで話そう」という本音を語りやすい雰囲気子ども達とともに作っていけるようにしたい。また、話し合いの前に座席表を配布し、読む時間を設ける。子ども達同士がお互いの考えやその根拠を把握し、「聴いてみたい」という思いを持って話し合ったり、考えの変容に刺激されたりしながら、考えを深めていけるとよい。

本時においても、座席表を活用し、互いの考えを視覚的に確認しながら話し合えるようにしたい。また「自分たちが平和のためにできること」という問いに対し、意識的なことから行動的なこと、一人ではなく周囲へ働きかけることなど、様々な考えが出されるだろう。板書でそれらを整理していくことで、考えを深める一助となればよい。

単元目標 「平和」に関わる自分の意見が説得力をもつように、例や資料を集め、いけんをめぐりつつたえるために、構成や表現の効果を考えることができる。
平和に関わる様々な資料を探したり、友達の考えを聞いたりして自分の考えを深めることができる。

学級文庫
8月 関係する新聞記事
戦争関係、原爆関係の本
(記録、物語、絵本、漫画など)

《社会科》
武士の時代…なぜこんなに戦うのかな
日清・日露戦争…いつになったら今のよう
平和にならなくなるのだろうか？

《道徳》
「日本とトルコの友情」
「原爆について」
「東京大空襲の中で」

《討論会をしよう》・反論をふまえて意見を述べる・説得力のある例、資料を集める《やまなし》題名の意味を考える《生き物はつながりの中に、鳥獣戯画を読む》読み手の目線を意識して文章を書く

★争いのない平和な世の中がいいな

○「平和」って何だろう。

- ・戦争がない
- ・安心して眠れる
- ・3食きちんと食べられる
- ・水道水が飲める
- ・暴力・ケンカ・いじめがない
- ・まったりしている
- ・びくびくしなくていい
- ・今の私達の生活
- ・平和＝理想
- ・100%実現は不可能
- ・ミサイルや核兵器のニュースを見たよ
- ・集団的自衛権や憲法九条という言葉をよくニュースで聞けれど…
- ・他の国では今も戦争をしている
- ・もしかしたら日本も…
- ・今の世界は、「平和」といえるのかな。 ・いろいろ今も争いはあるよ ・地雷みたいに、昔の争いのあともあるよ
- ・日本だけが平和でもダメ ・うわべだけの平和なのかもしれないね ・これからどうなるのかな。
- 今はいいけれど、10年後、50年後はどうなっているのかな

「平和」とは言えないのかも…

○どうしたら平和に近づくのかな。

根拠を明確に話し合いができるよう、ノートや調べた資料のコピー、座席表などを配布しておく。

- 《国が…》
 - ・核兵器・武器を持たない
 - ・悪い武力を使わない
 - ・お互いの国のことを考える
 - ・EU みたいに仲間になる
 - ・国同士で約束をつくる
- 《個人が…》
 - ・思いやりの心を持つ
 - ・戦争はしないという意味を持つ
 - ・ほどほどで満足する
- 《どうしようもない》
 - ・権力がある人が決めること
 - ・完全な平和なんて無理
 - ・現状維持することが大切
 - ・なんじゃないかな

約束しても守らない国(人)もきつというよ全員が、って難しいんじゃないかな

平和を維持したい、将来不安だな。⇔でも、戦争をなくすのは無理なんじゃない？

資料「平和のとりでを築く」を読んで考えよう。

文章の構成や表現に注目し、筆者の主張をとらえると共に、意見文を書く際に振り返っていかせるように模造紙などに書いて掲示しておく。

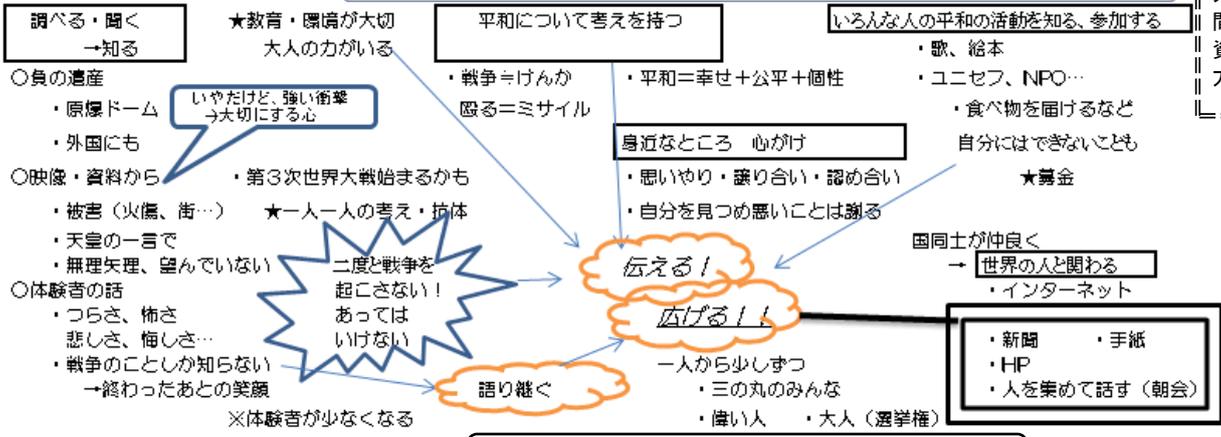
- ・難しい
- ・とりでって何？
- 《筆者は何を伝えたいのかな》
 - ・原爆ドームを残すことで、戦争の被害を忘れないことが大切だってこと。
 - ・原爆はダメだ、って言ってる ・事実を語り継ごう、という気持ちなんだと思う。
 - ・見た人の心に「平和のとりで」があることが大切だって最後に書いてあるよ。最後が一番の主張でしょ。

私達が「知る」「考える」「伝える」ことがたいせつだ！

・だから「ちいちゃんのかげおくり」「ひとつのはな」みたいな戦争のお話を勉強したんだね ・話しに来てくれた人も、こういう気持ちだったのかな

○私達にできることを考えよう【本時】

話し合う前に、十分な一人調べ、考えをまとめる時間を確保する。資料の集め方や読み取り方を確認する。



○今の自分の考えを意見文にしよう

読み手を意識して書くことができるよう、書く目的や相手をしっかりととめるようにする。

- ・教科書を参考にしよう
- ・始めと終わりで考えをはっきりとさせているね
- ・正直な気持ち書いた方がいい。きれいな事じゃダメ
- ・実際にあったことを入れるとわかりやすいし説得力が出る
- ・投げかけるように書くと、伝わると思う
- まずは身近な人に伝えたいな 地域の人に読んでほしいな HP でたくさんのひとに読んでほしいな

・これでいいかな。 ・ちゃんと伝わるかな？ ・変なところはないかな ・〇〇さんの書き方、よかったな。 ・自分なりに一生懸命考えられたな

6 本時について

① 目標

平和にするためにできることについてそれぞれの考えたことや調べたことを話し合う中で、自分の考えを広げたいという意欲を持ち、意見文を書く目的意識を明確にする。

② 展開

分	主な学習活動	○主な支援・留意点 ★評価【観点】
10	<p>1. 自分の考えを読み返し、確認をする。 2. 少人数で意見を伝え合う。</p>	<p>○ 少人数で発表の練習をすることで、自信をつけられるようにする。</p> <p>○ 個々が考えていることと調べたことを色分けしながら、関係性が分かるように整理して板書をする。</p> <p>○ 難しい言葉などの時には、言い換えやペアで確認する場を設けることで、理解できるようにする。</p> <p>○ 「誰か」することなのかを意識できるようにしていく。</p> <p>★ 自分の考えを積極的に伝えようしたり、友だちの考えを聞こうとしたりしている。(発言・ノート)【関・意・態】</p> <p>★ 相手にわかりやすい話し方で話したり、自分の考えと比べながら聞いている。(発言・ノート)【関・話す】</p>
40	<p>4. 本時の振り返りをする。(ノートに書く)</p>	

7 実践を終えて

本単元では、読み手により自分の考えが伝わるような書き方の工夫をして、意見文を書くことを目標として設定している。そのためには、伝えたいと思える自分の意見が必要であると考えた。伝えたいと思えるようになるには、自分なりに現状に問題意識を持つところから始め、じっくりと調べ、知ることが大切であると考えた。

そこで、まず「平和」という言葉のイメージから子ども達と練り上げていくところからはじめていった。友達の話の聞き、「そんなこともあるのか」「知らなかった」と自分にはなかった見方や事実気づいていった。さらに、実際にどのようなことが起きているのか、特に「平和とは言い切れない現状」について、子ども達はもっと知りたい、知る必要があるという問題意識や意欲を持ち、よく調べる様子が見られた。話し合いを通して自分なりに世の中のことを改めて考え、知ろうとする場が持てた。「平和観」が深まったことは、本単元をじっくりと進めてきた一つの成果であると感じている。また、そのような意欲や意識を育て、調べ学習もしやすくなるよう、様々な資料を教室に用意したことは、本単元の学習を進めていく上で大変効果的であった。

その中で、やはり、「そう考えると、真の平和を実現することは難しいのではないか」「しかしこのままでよいのか」という話題が出てきたので、「平和のために自分達ができること」について考える段階にうつった。しかし、子ども達のノートや対話、調べ学習の様子から、もう少し「平和」とは何かを考えて議論したい、もっと現状について知りたい、調べたいという思いがあったように思える。「平和」というものの認識が子ども達の中ではしっかりとできておらず、「自分達ができること」という問題に対する切実感が、あまり高まらないままに本時を迎えた子が多かった。子ども達の思考を無理にこちらの意図する方へと引っ張ってしまった部分があった。その結果、本時の話し合いでの焦点が定まらず、話し合いがなかなか深まっていかなかったという反省点がある。授業の焦点化を図るためにも、前時までの学習の過程の中で、クラスで共通の認識としておさえておくべきことをおとさないようにすることが必要であった。話し合いは、より本音を語り合いやすくするため、子ども達の司会で進める形をとった。「討論会をしよう」の学習での司会は、型に沿って行ったものであったため、子ども達は今回もそのように進めようとしていた。その結果、友達の考えに自由に反応を返したり、ひとつの考えについてじっくり考えたりすることがしにくくなってしまった。そこで子ども達に任せきれず、中途半端に教師が進めてしまう形となったことについては、本単元における課題である。単元だけでなく、学活や総合、他教科において自分達で問題意識をもって話し合いを進めていけるよう、経験を積んでおく大切さを感じた。そして委ねるのであれば、子ども達を信じ、しっかり委ねきらなければいけない。教師が進めていくとき以上に様々な場面を想定し、教師の出所を吟味しておく必要があった。

本時においては、平和にするためにできることについて考えを話し合う中で、意見文を書く目的意識を明確にするところまでは至らなかった。しかし本時での話し合いは次時に続き、そこで「伝えたい」という思いが持てるようになってきた。友達の考えや、その根拠となる事実を知り、子ども達の平和に対する思いは、深まったと見とれた。もっと「平和」ということについて考えたい、知ったことやそこから感じたことを伝えたい、分かってほしいという思いをもつことができた。本時にねらったひびき合う姿はみられなかったものの、単元を通して、友達とともに考えてきたことで、お互いに考えを高め合うことができたと感じ取ることができた。

また、調べる中で、様々な表現方法で平和を訴える人々の存在を知り、意見文以外の方法で思いを伝えたいという考えをもつようになった子がいた。その子話を聞き、共感した子も多かった。そのような子達にとって、単元目標として設定している「意見文を書く」という活動については、あまり自然なことから感じられなかったのかもしれない。子ども達の思いを大切にしながら、教科として大切な部分を主体的に子ども達が学んでいけるような単元の構想をたてることの大切さを改めて感じるとともに、その難しさを痛感した。